

「太陽のめざめ」 ★★★

2016 (平成28) 年7月22日鑑賞<シネ・リーブ  
ル梅田>

監督・脚本：エマニュエル・ベルコ  
フローランス (引退間際の判事) / カトリーヌ・ドヌーヴ  
マロニー (16歳の少年) / ロッド・パラド  
ヤン (マロニーの教育係) / ブノワ・マジメル  
マロニーの母親 / サラ・フォレスティエ  
テス (クロディーヌの娘) / ディアーヌ・ルーセル  
クロディーヌ (更生施設の指導員) / エリザベート・マゼヴ  
CEFの責任者 / アンヌ・スアレス  
ロバン弁護士 / クリストフ・メネ  
検察官 / マルタン・ロワジヨン  
事務員 / リュシー・パルシュマル  
グラディス・ヴァティエ / カトリーヌ・サレ  
マロニー (6歳) / エンゾ・トゥルイエ  
ルド / リュドヴィク・ヴェルティヨ  
祖父 / ミシェル・マゼロ  
校長 / マリー・ピエモンテーズ  
2015年・フランス映画・119分  
配給 / アルバトロス・フィルム、セテラ・インターナショナル

◆カトリーヌ・ドヌーヴは『シェルプールの雨傘』(64年) (『シネマルーム22』未掲載)、『昼顔』(67年) 等ですばらしい美しさを見せてくれたフランスの名女優で、近時は、ベネチア国際映画祭の審査員長等も務めている。そんな彼女が70歳を越えた今、少年裁判所のフローランス判事役で主演したのが本作。

少年裁判所は日本の家庭裁判所で、フローランス判事は少年事件を担当する家庭裁判所の裁判官と同じ立場だが、フランスでの少年事件の処理システムは日本とは全然違う。弁護士の私としてはまずその点に注目だが、さて本作はどんな物語・・・?

◆本作で、問題ばかり起こす少年マロニーを演じたロッド・パラドは、「アラン・ドロンやリバー・フェニックスの再来」と称される美男子で、フランス国内で最も権威のあるリュミエール賞とセザール賞で有望男優賞を受賞したそうだ。

非行を重ねて家庭裁判所のやっかいになる少年は当然のように何らかの「家族問題」を抱えているが、本作に見るマロニーの母親(サラ・フォレスティエ)は、6歳だった時のマロニーをフローランス判事に「くれてやる!」と叫んだほどの出来の悪さ。その男関係のだらしなさは、その後もあまり変わってないらしい。しかし、母親がそうだからと言って息子の非行が正当化されるわけではないから、本作でフローランス判事がマロニーに対して見せる優しさは、さていかがなもの・・・? もちろん、そこには賛否両論あるが・・・。

◆フローランス判事から「次は刑事問題よ」と警告されたにもかかわらず、程なく「次」が起きた。しかし、それでもフローランス判事は、検事が主張した少年院ではなく、より自由に過ごせる更生施設送りを選択。そして、新しい教育係ヤン(ブノワ・マジメル)をつけることに。ここらあたりの丁寧さには心から感服。

その後、マロニーは指導員クロディーヌ(エリザベート・マゼヴ)の娘テス(ディアーヌ・ルーセル)と恋に落ちる展開になっていったから、うまくいけばスナリ更生の道を? そう思ったが、何の何の・・・。

◆施設を出た後、職業研修を受けるというプログラムには感心だが、ヤンが探してきた飲食店で無断欠勤したうえ、迎えに来たヤンをハサミで脅かすマロニーの姿を見ていると、いい加減イヤになってくる。さらに、兄に続いてこちらも養護施設に入れられてしまった弟のトニをこっそり連れだし、盗んだ車に乗せている時にマロニーは重大な交通事故を・・・。こりゃ、どうしようもなし。こうなりゃ刑務所入りは免れないが、そんな状況下、フローランス判事を選択は? そして、マロニーの人生は? その再生は?

ある意味で、人権の国、フランスに感心するとともに、ホントにここまでやる必要があるの? 正直、そんな気持ちに・・・。